

THE YONEYAMA UMEKICHI MEMORIAL HALL REPORT

米山梅吉記念館 館報

2004
(平成16年)

春

Vol. 3

長泉中学校 米山梅吉デー



館報第3号発行に際して

理事長 内藤成雄



どちらかと言うと暖冬といえる年でしたが、何とか御都
ら見る富士はまだ深く雪を被っておりますが、桜
は既に葉桜、前庭の花水木も綻び始めました。

全国のロータリークラブ、ロータリアンの皆さ
ま、年度終末そして新年度に向けての御準備で日々
御多忙のことと存じます。日頃の御協力にお礼を
申し上げます。米山梅吉記念館より御挨拶を申し上げ
ます。

春暖とともに御来館の方々、クラブ数も増え始
めました。現況は資料①の通りです。極だって増
えてもありませんが定着しているようです。館所
在静岡長泉町は東海道新幹線三島駅下車、車5
分の交通至便の距離にあり富士山、箱根、伊豆の
景勝を借景としたレジャー施設の多い場所です。
当然館見学と異動例会のツアーの計画を組むクラ
ブも増えておりますが、各クラブの親睦、米山委
員会等での新年度計画として組立てて頂ければ大歡
迎し地元としてお手伝いさせて頂く用意を致し
ております。館のあるR1第2620地区(静岡、山
梨)では地区組織に米山梅吉記念館委員会をもち
ガバナー委員の部運委員が執行部と一体となっ
て御案内お手伝いをさせて頂いております。

館の年間の恒例行事に春と秋の例祭があります。
春は米山翁の命日(平成16年は4月28日)秋は館
創立記念日に行っております。特に本年は館創立
35周年の特例年であり、秋の例祭を開いて特別記
念行事を計画、只今準備中です。日時は平成16年
9月18日(土)に予定しております。出来るだけ
簡素に心懸けておりますが、記念講演は豪華に
と講師に詩人で高名な大岡先生をお願いし御快
諾を得ております。先生は三島市出身、平成15年
度文化勲章受賞者、本年の宮中歌会始の召人を勤
めておられます。会場は館は手狭のため三島の東
レ総合研修センター大講堂で行います。

本紙表面御案内にも載せましたが、何とか御都
合つけていただければ幸いです。

記念行事のもう一つの計画は「米山梅吉記念館
35周年史」の編集出版です。只今井口賢明編集委
員長の下、編集委員が連日集合準備中です。この
本は単なる報告的アルバムでなく米山翁一代の歩
いたみち、特に日本ロータリーの黎明期に米山翁
が活躍された足跡、記録、文庫等未発表資料も含
めた保存版に致したいと思っております。

最後に財政的な現況について御報告いたします。
運営資金は当2620地区資金、神奈川2地区(2500、
2780)、ロータリー米山記念奨学会、賛助会費、各
クラブの周年行事寄附、米館者スマイル、館内グッ
ズ販売等によっておりますが、もともと全国ロー
タリアンの離金によって建設されたものだけに入
館料はいただいております、事業費等にまわせる経
費は到底賚りすることはできません、そのための対策
としてスタートした全国ロータリアンの皆様に年
間1人100円離金運動ですが、幸い全国からのご送
金を連日いただいております。このころみは勿
論賛金援助のお願いの他、お1人でも多く館への
御心意をもつて頂く一筆レターのような意も含め
ております。幸い予想通りの御協力で本年3月末
現在で360万円に達しております。地区単位は敬地
区、個人もありませんが喉んどがクラブ単位でま
めて御送金いただいております。誠に有難く厚く
御礼申し上げますと共に改めて米山梅吉という名
の大きさと重さを痛感しております。別掲御協力
いただいたクラブ名を掲載しておきました。(資料
②)この募金運動は次年度も続けるつもりでおり
ます。何卒よろしく御願い申し上げます。御元氣
でロータリー活動をエンジョイして下さい。
(平成16.4.13記)

米山梅吉記念館の近況

資料①

1. 入館者数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
1,224	331	112	188	452	299	424	376	55	79	172	169	3,881

2. 来館ロータリークラブ数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
9	12	6	6	9	14	23	11	3	6	6	9	114

3. ロータリアン及び一般来館者数

月 度	ロータリアン		一 般		全 体 合 計	
	当 月 計	累 計	当 月 計	累 計	当 月 計	累 計
4月	204	1,161	1,020	1,223	1,224	2,384
5月	167	1,328	164	1,387	331	2,715
6月	78	1,406	34	1,421	112	2,827
7月	136	1,542	52	1,473	188	3,015
8月	363	1,905	89	1,562	452	3,467
9月	282	2,187	17	1,579	299	3,766
10月	414	2,601	10	1,589	424	4,190
11月	187	2,788	189	1,778	376	4,566
12月	49	2,837	6	1,784	55	4,621
1月	69	2,906	10	1,794	79	4,700
2月	146	3,052	26	1,820	172	4,872
3月	147	3,199	22	1,842	169	5,041
合計	2,242	3,199	1,639	1,842	3,881	5,041

4. 来館いただいた主なクラブ・団体(※は移動例会)

2620 裾野RC(※)	2620 三島西RC(※)	2620 浜松中RC
2620 米山記念奨学会有志(※)	2500 岡崎大師RC	2780 浜名名譽RC(※)
2620 裾野・長泉ガバナー部運委員会(※)	2600 岡崎南RC	2510 札幌南RC
2620 米山奨学生	2620 朝代多賀RC(※)	長崎小学校4年生
2640 米山奨学生	2580 東京東RC	2820 土浦RC
2580 東京浅草RC	2620 裾野RC(※)	2620 米山記念奨学会選考会
2780 鎌倉大船RC	2780 厚木中央RC	2590 川崎富沼RC
2780 平塚北RC	2780 米山奨学生	2620 岐阜城RC
2780 名古屋北RC(※)	2620 沼津西RC(※)	2620 裾野RC(※)
2580 東京葛飾RC	2580 東京新南RC	2570 朝陽RC
2750 東京恵比寿・武蔵中央RC(※)	三井信託OB	2780 インターアクト

◎2003年7月より長泉RCは米山梅吉記念館を例会場とし、より記念館への奉仕を深めております。
(例会日: 毎週水曜日 12:30~13:30)



ロータリー米山記念奨学会吉岡事務局長と共に
新食器断金メンバーのロータリー勉強会



名古屋北RC(41名)の記念館での移動例会と
館の清掃奉仕

2003年9月20日(土)に恒例の秋季例祭が、多数のご来賓を
迎え行われました。初代信託協会会長・専務理事の永田俊一
氏による記念講演、アトラクションではジャズ演奏会が行わ
れ、梅田翁の遺徳にふれる一日でした。



▲挨拶する内藤理事長

▼講演する永田俊一氏



▲講師紹介・坂本顧問



▼熱心に講演を聞き取る
に来場のみなさん



▼懇話会 講師を囲んで



▲懐かしいジャズ演奏で和やかな一時



演題 「米山翁と信託協会」

講師 信託協会副会長・専務理事 永田 俊一氏

日 時 2003年9月20日(土)
14:00~17:30

会場 財団法人 米山翁記念館

はじめに

実は今日ご要請を受けてお話をさせていただけだこ
と考えました。永田さんと当協会の縁が深いため
とあります。私「信託」の企画で、列談をさせてい
ただき、むしろ私のほうこそ、初代の信託協会会長であ
る米山翁さんの人となりにつきまして大変教えて
いただきました。私は坂本さんと対談の前にも、こ
の記念誌を見学させていただきました。もう一度こ
ちらに伺って、大変すばらしい皆様方が参加されて
おられるこのロータリークラブ、そして米山記念館
関係者の皆様にお話ができたらありがたい、
ということでおっしゃりました次第です。

米山協会長のラジオ放送

米山翁さんが信託協会会長としてラジオ放送した
もののポイントが下の資料です。3点ほど社があり
ました。

最初に信託制度の実態と関東大震災があります。
信託制度はまさに関東大震災の年の、大正12年(1923
年)1月から発効されたわけですが、その年の9月
に関東大震災があったというところで、その辺を導入
してお話をされています。

第一次世界大戦が終わった後の不況の中で大震災
が起こった。これは大震災、先達り社会を築いてい
かなければいけないという気持ちがある人の心の中
に非常に強く起こってきた。この気持ちがあるし長続
きするのであれば、社会が、完全なものになっただ
ろうにと置っておられます。放送が行われたのは1926
年で、大震災から3年ぐらいいつづいていました。あるい
急なことにもうこの感じが消えてしまった、あるい
は消えつつあるということと同時に述べておられる
のです。

その意味するメッセージは我が国が第一次世界大
戦の主戦場であったことによる競争果敢、いわゆ
るパブル景気が壊れてみて、産業の構造や国の在り

米山翁信託協会会長のラジオ放送原稿

(大正15年4月17日)

1. 信託制度の実態と関東大震災 (大正12年)
2. 信託制度とは
貸付、仕組、目的、受託者 (信託会社)、信託
会社を利用するメリット、信託の活用方法
3. 信託が経済社会に果たす役割

方を変えようという改革を思い描いてやらないと国際
競争力は維持・強化できません。ますますじり貧になっ
ていくといった認識があったわけですが、さらに大震
災が来てそこで経済がガタガタになったわけですが、
ところが政策的には、同時にやるべき構造的な問題
処置は進上りして、震災手形をパンパン出したりし
て、世済の方に逼った。すなわち物価崩壊に走り、こ
れは大震災、しつかりやりやらずにはいけないとい
う気持ちなどかかっているように思っています。それら
とを置っておられるのだからと想います。それから
後にくる日本の運命などを考えますと、社会の制度
疲労と向き合った、ある意味の分岐点であったと言
えましょう。時代の潮流を正しくとらえ、それに乗
り、国の有り様を変えていく、そのチャンスと迷が
しているのではないかと想います。結果論として、これが
たのではないかと想います。結果論として、これが
政策対応の重要なかけ橋の一端だったとも言えよ
うかと思えます。

放送の方はその話を導入にしまして、米山さんは
その次に信託というものがいかに経済社会に果たす
役割として重要なものかというお話をされているわ
けです。

信託の仕組み

信託は、委託者と受託者、そして受益者がいると
いうことで、委託者が財産を受託者に、信託する目
的を明らかにして契約し、その成果物を受益者に交
付する形になっています。重要なのは、委託者、受
託者、受益者の三角関係であるということです。

それから、信託の目的はさまざまと定めて、それ
で契約することです。目的には、自分の孫子の代ま
でこの財産を継がせたいとか、いろいろあると思っ
ます。大きく分けると、自分の財産をこう運用し
たいといった節税の目的、現在でいえば年金みたい
な形ですが生活の目的、さらにこういう奉仕活動に
関連して使いたいという公益目的といったものが高
まっています。

もう一つの特徴は、信託に託される受託者の義務
がすごく重いことです。そこに三つほど注意義務な
どが書いてありますが、善管注意義務は、善良な管
理者の注意義務をもって処理すること、民法の善
管注意義務よりも重い義務を負っています。それ
から分別管理義務は、信託財産を受託者個人の財産

やその他の信託財産ときちんと分けて管理をしなればいけないことです。所有権が移転しますので、独立財産として受益者が自由に運用しても財産は減っていないという形にしなければいけないわけです。それは不可思議な、国庫の財産として取得することからありまして、まさに忠実に執行していくということ、このように受益者には重い責任が負わされています。

当時の信託と今の信託

米山さんがラジオに登場した頃は、ある意味で本当に驚くほど自由なところから、ルールをきっちりして真に市場らしくやろうというところに入った時代といえ、今はむしろ規制でがんじがらめであったもの、ルールはもちろんなさちとして白田にしていこうということで、たぶん同じような環境に入っていくということではなからうかと思われざるを得ない。

そして、改選の前後に、信託が経済社会に果たす役割として米山さんがおっしゃっていることがあります。

一つは、経済界に大変不可欠な仕組みとして信託というものの有用性ということ、大震災で人々の心が非常に不安に陥ったわけですが、財産とかそういう面で個人の安全地帯としての信託の役割といたことを述べています。また、例にしているのが、「大震災の貯めただけではなくてどう処理するかだ」というソクヲ子さんの書も引いておられます。そういう意味で今も資産の運用をどうやっていくかという時代に差し掛かっているということ、符合しているということではないかと思えます。

80年前の構造改革と現在

1914年に第一次世界大戦が始まったわけですが、1915年には大震災、その後、料金を1918年に認めました。1920年には軽便鉄道が後の国鉄から始まるというところで、先ほど申し上げたような不況の中で東大震災が起こったということ、1922年には信託法の制定があったということ、そして米山さんが言われたように、しっかりとやらなければいけないと経済界も一般の人々もみんな思ったのですが、どうもその心が消えてしまったと言っているうちに昭和金融恐慌が起こりました。

大震災別は、要するに自分の実力以上のものが入ってくるということ、ある意味でパブルの降期です。ブラッックマンデーというのがある1927年にありましたが、こういう時期に重ねられるらうかと思えます。それから世界的な不況の波ということ、いき

ますと、ベルリンの壁が崩壊したのが1989年です。で、まさに全体として世界的な供給超過という形になっていくわけ、これは今のところ完全には終わっていないわけ、ですから、この10年、あるいは15年を以前の10年とか15年と比べると、世界的にとかディスタインフレ傾向であることは事実です。その中で日本はパブルにも関与し、そして実質ある意味で遅れた自由化といいますが、先進世界に一期遅れた規制緩和が仕上げに入ってきてきたところへわけです。そういう時にさしかかかってきたところへグローバル化の波が襲ってきて、更にデフレ傾向が強まっているということだと思えます。

こう見てまいりますと、パブルの壁が崩壊してから相場がピークをつけ、パブリンの壁が崩壊してから2年しかかからなかったわけですが、パブルの崩壊から累次の景気対策、あるいは金融システムの不安心対策を行ってきています。1995年に阪神大震災があり、そして1997年から1998年にかけては、三洋証券、山一証券、北洋信託銀行、日本長期信用銀行とかの金融破綻が起こっているというところで、そこが、そこから先がどうなるかというところ、ところがラジオ放送との関連でも重要になってくるのだらうかと思えます。先ほど申し上げましたように、毅然として社会改革を行おうという気持ちが見えつつあるということに米山さんがどういうメッセージを込めたかということに関連するのだらうかというところです。米山さんは、その後、三井信託とか、あるいは静岡小学校をお作りになられて、子女孫々に思いを伝えていきたいという活動されたらうかと思えます。で、まさにそこにも表れているのだらうかと思えます。

米山さんは明治元年に生まれて、お年と時代が同じ、子ンポで運んでいったわけ、昭和21年(1946年)に親戚ながらご逝去されたわけですが、坂本さんにもお話を聞いたり、勉強させていたみたいで、ご自身が過ごしてきた時代は非常に激動の時代だったのだらうかと思えます。最後に到達したところは、陣として強き結果だったのだらうかと思われ、そういうことには二度とならないようにしてほしい、というお気持ちも強くあったのだらうかと思えます。坂本さんのご本などを見ますと、米山さんがごられる前にお読みになっていた「老いかつ神妙なゆるめる身は我が國の新しき歴史見まもりてあらむ」という歌が載っていました。巻いているのは酒んで居るご自身の身と我が國の身を重ね合わせて、新しい歴史を見守っていききたいということをおっしゃっているところから見ますと、そういう思いがずっとおありになったのではないかと私は感じているわけですが、(ご講演の一部を掲載しました。(幸田 重彦))

長泉中学校 の 米山梅吉 DAY

2014.4.27

生徒会の日中事業



▲委員会のメンバー、サポーター、ボランティア、紹介、アイスブレイク

▼長泉ROとの交流

▲Aコーンダンス、(アコーンダンス、アイスコーンダンス)



米山梅吉デーについて

米山梅吉記念館が所在する静岡長泉町内の全ての小中学校(小学校3校、中学校2校)では、梅吉翁の命日である4月28日を「米山梅吉デー」と定め、学校の年間行事に組み込み、奉仕活動を行っている。

梅吉翁は「人々にしてほしいとあなたが見たい人を他の人にもしてほしい」という考えを信念としてきた。米山梅吉デーは梅吉翁の遺徳を尊重し、その業績を称え、他人を思いやる心、奉仕の心の実践を次代を担う子どもにも伝えること、米山梅吉記念館の地元ロータリークラブである長泉ロータリークラブが呼びかけ、町の教育委員会が各小中学校と協賛して始めたものである。1993年4月28日を第1回の「米山梅吉デー」と定め、以来、毎年

三枝徳造

米山梅吉記念館委員
地区副委員長 (長泉ロータリークラブ)

小中学校において梅吉デーの集いや公共施設の清掃活動の他、保育園・幼稚園・福祉施設への訪問による福祉活動等、多方面の活動を10年以上継続実行している。

また、小中学校では、各校の独自の行事として、毎月28日前後の日に「米山デー」、「福祉デー」などと題し、清掃活動や福祉活動を行っている。特に、長泉小学校においては、毎月クラスごとこの輪番で、米山梅吉記念館の清掃作業を行っている。この事業の呼びかけをした長泉ロータリークラブも、各小中学校の行事計画に合わせた子どもたちも奉仕活動に汗をながしたり、米山梅吉デーの集いに参加している。学校は子どもたちの健全育成の担い手としてロータリーに寄せる期待は大きい。

▲米山梅吉の足跡を辿る、長泉中学校、米山梅吉記念館

米山梅吉翁の少年時代の足跡をたどって 一箱根を越えて横浜まで100kmウォーキング



第2830期 京道ロータリークラブ

近藤 福次

東京RCの創設者であり、日本のロータリークラブ生みの親ともいえる米山梅吉翁の少年時代を知る人はあまりいない。幼少時に父を亡くし、母の再婚の三島に移り住み、12歳の時長崎上土村の米山家から養子に望まれた梅吉少年は、明治中学期代に板垣退助らの演説を聞き、生田家といえぬ地元米山家の婿地主として暮らすことより東京にでること決意し、都里を出奔するのである。梅吉少年16歳時（明治16年）のことである（『米山梅吉翁物語』から）。

この妹たちが後の人生の大きな第一歩になったのかも知れない。16歳と言えども春期の真只中、ひよっとした言葉がその人の人生を左右しかねない程、感受性の敏感な時期とも言える。この物語を知って私も同じく比叡山を目指して京都口から夜一人で登ったことがあり、そこで母の人の気持のありがたさは今でも覚えている。また比叡山に就き、法學を学んだSynyuce大学の町には、当時すでにハンセン氏病（ついで近までマイコトとして恐れられていた）患者のケアに携わった St. Francisの施設（学生が現在ホスピス・ホスピタリティをしているSt. Francis Hospicesの始まり）があり、晩年米山梅吉翁が全国を廻ってライオン会者を見舞い、病院増設まで尽力された気持の根柢に、このSynyuceでの歩点が何かしら想像された。

この二つが小生の生き方と重なり合って、今日どうしても梅吉少年が東京へ一人旅立ちした長泉町（米山記念館）から横浜まで三日間の足跡（横浜からは汽車にて東京入りしているため、横浜まで歩いた三日間の足跡）をたどってみたいと思った。

長泉町（米山記念館）から箱根峠を越え、箱根旧街道を通り、小田原・平塚、茅ヶ崎から保土ヶ谷・榎太坂を越えて旧橋原駅（現在の榎木町駅）まで約100km。今の私に歩きまされるだろうか？

夏に予定したが、暑い時期は脱水を起こしやしない、仕事のこと・家庭のことを考えると「いつ」という日

を決めかねていたが、当クラブの天和副会長、使節二群（財）ロータリー米山記念奨学会理事、長泉RCの知原精一会長や米山記念館の市川真理さんにとこのことを伝えると、深い理解と熱いメールを感じ、是非この思いを実現させようと、予定を11月7日からの三日間と決めた。そしてタイトルを「米山記念100kmウォーキング（箱根を越えて横浜まで）」とし、一日目できれば小田原までの約44km、小田原から横浜までの中間点茅ヶ崎を二日目の目標とし、家庭・仕事・足の状態を優先して、何かあれば途中で中止もやむを得ないとした（梅吉少年の後は戻れない気持ちはとほかなり差があります）。

いよいよ当日。朝6時に記念館を出発、数分後後ろを振り返るとうっすらと朝焼けした富士山が、「いつてきます」と再度語り、三輪大社に参拝し、「あなたの子梅吉大先輩がした旅立ちを私もこれこれしてみます」と母のたきんに報告。途中松雲寺近くの国道1号から富士山が、これほどまでに感動した富士山は今までに見たことなかった。米山先輩のおかげと胸が熱くなった。



箱根峠を越え、箱根旧街道に入ったのは午後1時半すぎ。石畳で歩きにくいのが、やがて下り道になり、一時間はほど甘酒茶屋に到着。甘酒が本当にうまかったが、あたたかくなってきた店の人の気持の方がうら

れしかった。30分ほど榎木（かしのき）坂、ここで一人のご婦人と行き交う。先程まで下で立て看板を見ていた人だ。「大丈夫ですか」「私、下りより登りの方がつらくないの」と言う。「あの人スゴいな」と思いながら、降りてきた。本当に険しい。香川の金澤山山の階段を2倍速にしたような階段道だ。そして看板の説明に驚いた。

『けわしきこと、道中一番の難所なり・この坂こゆればくるしくて、どんぐりほどの涙こぼる・』私は急に大事な言葉がけを忘れていたことに気がついて大き



な声で叫んだ。「あまり無理しないで下さいよ」・「ありがとうございます。私にしては心流し人思いやっただ言葉がけであった。それから箱根を過ぎ、大沢坂を下り、奥湯元に着いたのは薄暗い4時半頃であった。ホテル前風荘で特別に入浴させていた。小田原市民会館前に着いたのは7時を過ぎていた。足がかなり重たくなっていった。駅前のサウナ浴場で足を冷やしたためか、翌日には痛みや重さも取れていた。

二日目茅ヶ崎（小田原から約28km地点）過ぎの予定で、朝7時半出発。国道1号をひたすら歩く。立派な榎木に当時を想ひながら、果物園店先の試食用ミカンが甘くてうまい（なぜかミカン一切れでも感動するんです！）マナーケツで味見してもこんな感動は覚えません。大磯あたりからまた足が重くなり、相模川橋を越え茅ヶ崎市役所に到着したのは午後4時半すぎ。ホテルで朝まで3〜4日浴槽の冷水につかったが、少しまだ重い。

予定を早めて三日日は6時に出発。横浜まではあと27km。前日の28kmを9時間かかったので、今日は十分休憩を入れれば、午後3時には何とかゴールできるか？ 藤沢・戸塚を通り、保土ヶ谷の榎太坂から、保土ヶ谷橋に着いたのは午後2時少し前。残りあと5km。下段にはりがあるものの、先程までの重い感じは不思議と取れ、体まず一気に久保町・浜町駅・高島町駅を右に曲がってゴールの旧橋原駅（現在の榎木町駅）の足

金降へ。午後2時36分の到着であった。

今回この旅で、何がわかったのだろうか？

まず一つ目は、箱根旧街道がかなり険しかったこと。当時すでに石畳がしかれていたので、榎木坂・大沢坂をはじめ旧街道全体の険しきは朝を思い、長泉から箱根峠を越え（約21km）、その峻れた足でさらに箱根の道を越えた16歳の少年には、目的が何であれ辛かったにちがいない。そしてこのような状況下で、何かしら人と人との出会いがあり元気づけられ・励まされ、温かくされ・時に叱られ一ざりざりの状態から得た「やさしさ」「厳しき」や「思いやり」を、さらには人間は決して一人ではなかつたんだという「人と人とのつながり」を身をもって感じ、そのことを決して忘れることなく、一生の宝として心に持ちつづけたいのではなからうか。私が昔比叡山で得た気持以上のものが、梅吉少年に残ったのではなからうか。

二つ目は、箱根越えをしてから横浜までの道中（旧東海道）でのこと。思ったほどの険しきはなく、二日あれば十分行ける距離。しかしこの道中でも、体力の消耗・足の痛さ・重さは相当あったものと思われる。私がミカン一切れにもありがたかつたように、「やさしさ」や「思いやり」を実感し、「人と人とのつながり」に体の疲れを感じたのかも知れない。

そして今回の旅でも感じたことは、榎木坂での体験。私に限らず行き交う人々それぞれが、特に（箱根越え）等の難所の中で、ざりざりの状態にいて、しかもこういう状態でしか現れないと言われている「魂」からの気持を言葉にして面差し合うということ。私自身忘れられることのない体験があったこと。私自身心流から「無理しないで下さいよ」と言えたり、「相手を思いやる」「人と人とのつながり」をこれほど強く感じることはなかった。梅吉少年が、このような経験を16歳という最も感受性の敏感な時期に体験できたこととすれば、どうでしょう。たとえ梅吉自身日本を背負って働けうになつたとしても、箱根に胃された晩年であったとしても、行き交う旅人の「魂」から受けた気持があるからこそ、いつまでもいつまでも相手を思いやれたのではないだろうか。

成人した和田梅吉（米山梅吉）が、渡米後さらにどんな「人と人とのつながり」を経験したか、またSynyuceでどのような歩点があったのか、そのことを知らなくとも、社会奉仕に突き放いた米山梅吉に流れている精神を、今日の旅で少し垣間見られたような気が

創立35周年 記念行事

- 日時 平成16年**9月18日**(土)
記念式典 14:30~15:20
記念講演 15:30~17:00
懇親会 17:30~19:00
- 会場 東レ総合研修センター

- 講演 **大岡 信**先生 詩人・評論家(平成15年 文化勲章受賞)
- 演題 **【富士山は恋ごろの山】**
尺八演奏 宮崎 青 敏
琴演奏 草間 路代

米山梅吉記念館のご案内

開館時間

午前10時～午後5時 (但し11月～3月は
午後4時まで)

休館日

- 月曜日
- 12月28日～1月3日
- 整理のための休館日



米山記念館及び館報へのご意見、ご感想、寄稿等お寄せ下さい。

米山梅吉記念館報

Vol. 3

発行日 平成16年4月29日
 発行者 財団法人 米山梅吉記念館 理事長 内藤成雄
 TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101
 印刷 フタバ印刷株式会社